



聞き書き甲子園 研修の様子



美しい森林づくり推進国民運動



共存の森ネットワークの事務局長 吉野奈保子さん(右)と森山紗也子さん(左)

 森と暮らそう

今日からやろう！森のための

4つのアクション

『聞き書き』から、
農山村の未来を描く

—NPO 法人 共存の森ネットワーク—

共存の森ネットワークは、平成14年に始まった「森の聞き書き甲子園」に参加したOB・OGによる森づくり、地域づくりの活動をきっかけにして、平成19年にNPO法人としてスタートしました。

「聞き書き甲子園」は農林水産省、文部科学省、国土緑化推進機構等とともに実行委員会を結成し、運営事務局を担当しています。委員会の一員でもある国土緑化推進機構が推進する「フォレスト・サポーターズ」の理念に賛同し、平成22年に「フォレスト・サポーターズ」の一員になりました。今回は共存の森ネットワークの事務局長吉野奈保子さんと森山紗也子さんにお話を聞きました。

共存の森ネットワークの活動理念・内容

共存の森ネットワークは森と人の暮らしのつながりを取り戻すために、「人と自然・人と人との『共存』を基本とした社会づくり及び新たな価値観の創造に寄与すること」を目的に設立されました。これは、奈良県川上村の「森の名人」の「森は家や。人だけやなしに、動物や植物が共存するための家や。」という言葉から生まれたものです。

当会の活動として「聞き書き甲子園」の運営のほか、「聞き書き甲子園」のOB・OGによる農山村地域での「共存の森づくり」活動(全国5地区)、そして、昨年から都市部の社会人等を対象に、自然に根ざした仕事へのニーズなど、各々のライフスタイルに合った「なりわい」づくりをサポートする「なりわい創造塾」を展開しています。また、平成22年度から、里山林の再生に向けて、地域住民が主体となった里山林の整備活

ドキュメンタリー映画
「森聞き」のワンシーン



「共存の森づくり」茅刈り体験
(千葉県市原市)



「なりわい創造塾」農業体験
(埼玉県小川町)



「被災地の聞き書き101」(岩手県大槌町吉里吉里地区)



「森林総合利用推進事業」
(石川県能登町)

森にふれよう

木をつかおう

森をささえよう

動等を支援する林野庁補助事業「森林総合利用推進事業」を実施しています。

聞き書き甲子園10周年

今年で10周年を迎える「聞き書き甲子園」は日本全国の高校生が森の名手・名人を訪ね、生きる知恵や技術、人となりを聞き書きし、記録する活動です。昨年からは森を語る上でも重要な海・川の名人への聞き書きも始まりました。また、「聞き書き甲子園」を描いたドキュメンタリー映画「森聞き」が今年3月の東京での上映を皮切りに全国各地の映画館や、国際森林年記念イベントで上映され、映画を見た保護者から「子供のために地元でも上映してほしい」という声が上がると、大きな反響がありました。

そして、国際森林年記念関連事業の一環として行われた、今年の「聞き書き甲子園研修会 開講式」は、フレデリック・バック展が開催されている東京都現代美術館で実施されました。11月19日には、「聞き書き甲子園10周年イベント」の開催も予定しており、「未来に向かって私たちがからの提案 森と人、人と人、その100年先を描くために」をテーマに、聞き書き甲子園のOB・OGによるリレートーク、他のNPO団体の若手も交えたディスカッションなどを企画しています。

被災地の聞き書き101

3月11日の東日本大震災を受け、「私たちの「聞き書き」が震災の復興に役に立たないか」と考えました。そこで生まれた活動が「被災地の聞き書き101」です。被災地に足を運び、被災者の現状を聞き取り、それらの情報を発信していくことが重要だと考え、もともとあった生活の様子や、家族やご自身、地域の将来のことなどの話も交えながら幅広いテーマでお話を伺い、それらを集約してホームページ上で発信していく予定です。現在までに岩手県大槌町で50人、宮城県南三陸町で20人、石巻市で10人の方からお話を伺いました。「101」は、「切りのいい100ではなく次がある」という意味で名付けました。来年度以降もこの活動を続けていく予定です。

今後の取組

現在、「聞き書き」をインドネシアでも実施できるように計画しています。「聞き書き甲子園」に参加している筑波大学付属坂戸高校を通じて現地と調整中であり、順調に行けば平成25年には現地での「聞き書き」がスタートできる予定です。また、国連大学高等研究所の協力のもと、平成24年春に完成予定の英語版「聞き書きテキスト」は、インドネシアのポゴール農科大学コルニタ高校の授業等で活用予定です。